

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(44)

——第410号から第419号——

門 田 俊 夫

第410号 1712年6月20日(金曜日)

【スティール】

いやはや戸外では清潔に、当世風で上品に、こざっぱり
 している者は誰もいない。ご婦人方は、伊達男たちと
 飲食を共にするときは、できるだけきちんと食事をする。
 ところが、家にいるときのこういった不快なあばずれときたら、
 どうしようもなく食欲で、卑しく、お粗末なことこの上ない。
 パンの耳も無駄にせず、ひどいスープもこぼしながら熱心に
 ピチャクチャと食べる。こんなことが前もって分かっていると、
 若者たちは救われるかもしれない。(テレンティウス)¹⁾

最近体力の衰えを隠しているウィル・ハニコムは、ほんの気まぐれからふしだらな女のところへ行った後で、私たちにつぎのように言ったのです。この前の雨の降っている夜、サー・ロジャー・ド・カヴァリと連れ立って馬車でテンブルを通りがかったところ、全身完璧な身なりの一人の婦人が逃げ出して来ていたとのこと。ウィルは臆面もなくこう言いました。婦人は自分にとても親しげに名前で呼びかけたかと思うと直ぐに勲爵士に向って親友のサー・ロジャー・ド・カヴァリさんですよねと言ったのだと。すると、サー・ロジャーもすかさずお見知りおきをどうもと返事を返しました。彼女は黒いタビー織り²⁾のマンチュアにペティコートをもとっており、リボンを着けていませんでした。綿モスリンは縞模様で、全体的には感じがよく第二の喪に服しているような服装でした。この身繕いは、安価であることならびに控え目であることを見せかけることの双方を考慮して、売春婦たちがしばしば採用しているものです。彼女は引き続き馴れ馴れしく、貴方のお友だちのハニコムさんはこんなところに女性が誰も付き添いがなく一人でいるのを見て少し驚いていらっしゃいますねと言いました。係争中の小額の寡婦資産では弁護士でほとんど持っていかれてしまうので、どうしても必要なものしか出費は認められないので、入口で馬車

1) テレンティウス『宦官』934-40

2) タビー織りとは、波状紋を浮かして織った絹地の織物のこと。

を帰らせ、会議室まで歩いて来たとのことでした。サー・ロジャーの召使が馬車を呼びに行ったので、ハニコーム氏は彼女に自分たちをもう行かせて欲しいと頼みました。そう言っている間に、従僕が馬車を見つけれずに引き返して来ました。ハニコーム氏と友を彼女に任せ、入口の居酒屋で馬車を待つか、公共の場で彼女が受けるに違いない無礼な言動を我慢するしか取るべき道は残されていないように思えました。名誉を重んじるハニコーム氏は前者を選び、人の良いサー・ロジャーは婦人の手を取り、彼の帽子で彼女を守ってやりながら雨の中を歩いて行き、伊達男気取りで居並ぶ若者たちの中を進みました。若者たちは歩いて行くスーキーに目配せをしました。ハニコーム氏はしんがりを務めるのでした。

彼女を執拗に説き伏せて軽食を摂らせました。彼女は食欲がないと言ったものの、チキンを2枚とサラダを山盛り平らげ、ボトルを1本空け、サー・ロジャーのために「老人の願い」³⁾を歌いました。勲爵士は食事が済んでしばらくすると部屋を出て、つぎの恋文をしたためました。この恋文はスーキーのもとへ届けられ、スーキーはそれを友のウィル・ハニコームのもとへ届けました。ウィルがそれをサー・アンドリュー・フリーポートに渡し、サー・アンドリューが昨夜クラブでそれを読み上げたというわけです。

前略

私は単なる田舎の紳士ではありませんので、テンプルでの貴女の訴訟がどんなことなのか推測できます。もし貴女が田舎に来て、歌以外のあらゆる見栄を断ち切るなら、コヴェント・ガーデンのボウ・ストリート⁴⁾にある私の住まいを教えてください。よろしく。

草々

ロジャー・ド・カヴァリ

善良な友はご自身に降りかかる冷やかしにうまく耐えることが出来ませんでした。これをやめていただくために、私はつぎの手紙をウィル・ハニコーム宛てに出し、これを評議員会で読み上げて欲しいとお願いしました。

観察者様

最近の紙面でソロモンの歌のある章の英語訳を載せておられるのを拝見しましたので⁵⁾、詩的な衣装をまとった箴言第7章をお送りしたいと思います⁶⁾。貴殿の思索に取り入れる価値があるとお考えでしたら、どうかよろしくお願いします。

忠実な読者より

3) 「老人の願い」はウォールター・ポープの詩。

4) ボウ・ストリートは、ラッセル・ストリートからハート・ストリートにつながるコヴェント・ガーデンの東にあるストリート。

5) 第388号参照。

6) パラフレーズをした人物はジェームズ・ウォード。

わが子よ、わたしの言葉が伝える教えを、
あなたの心の生きた銘に刻むのです。
わたしが伝えるためになる教えを、
最大の畏敬の念を込めて守り、生きるのです。
あなたの敬意を全面的に知恵に向け、
知恵を守り、知恵の助けを求めるのです。
そうすれば、知恵はあなたの魂を守ってくれます。
あなたの足が売春婦の方へ向かないようにしてくれます。
売春婦は忌々しい魅力を発揮して油断している者を誘惑します。
そして、彼らの魂をうれしがらせて罪へと誘います。
かつて、わが家の窓から通りがかる大勢の浮ついた人々に
目をやっているとき、愚かな若者たちの中に、
聖なる知恵をガイド役にしていない一人の若者に目が行きました。
太陽が控え目な光を引っ込め、柔らかな夕暮れが
夜陰へと導いたそのとき、その若者はひそかな黄昏の中を
破滅へと向って進んで行き、売春宿の入口へと差し掛かったのです。
するとそこへ、一人の女が近づくのです。
服装はだらしなく、売春婦の心にぴったりのけばけばしいものでした。
この女は巧妙で要領も心得ています。
淫らな女は思慮に欠ける心を捉えます。
この女は強情で執拗です。この女は自分の家を嫌い、
居場所をあちこち変えながらうろつきます。
家の中にいるかと思えば、通りをうろついているのです。
今は道の角に立って、獲物を待ち構えています。
この若者を捉えたこの女は、女性のもっとも義に適った誇りの
慎ましさをすべてかなぐり捨てて、抱擁しながら、
家で感謝の供物をささげなくてはならなかったが、
今日その誓いを果たしたのだと言いました。
それでわたしはあなたを迎えようとして外に出て来たのです。
ご覧なさい、この幸せな時間に、ここであなたを見つけたのです。
部屋を飾り立て、ベッドにはとても素敵なつづれ織りを掛け、
周囲には凝った芸術家がこしらえた彫り物もあります。
ベッドにはエジプトの亜麻布を敷き、アラビアの素敵な香や
いろいろな香料の匂いが漂っています。
この女はあらん限りの香料、香水を用意したのです。
あなたをあふれんばかりの芳香の海の中に寝かせてあげる。
心地よいものをすべて集めているのです。

私に足りないものはあなただけです。
 私の夫は遠くへ旅立って、家にはいません。
 多額のお金を手にしており、当分帰っては来ません。
 この女の言葉には、こういった耳に快い害毒が宿っていた。
 口からはうれしいお世辞が流れ出た。
 無防備な若者は、絹のような足枷をはめられて、
 理性を放棄し、あっけなく誘いに応じた。
 こうして、牛は屠殺場へと向かい、迫り来る一撃は感覚にない。
 こうして、無知な鳥は罠にはまり、巧みな鳥撃ちに命を狙われる。
 だが、わが子供たちよ、注意して聞くのです。
 若い活力をさらけだして罪を犯してはならない。
 不実な誘惑者から逃げ出し、狡猾な売女の手練手管から
 あなたの心を守るのです。注意深く歩み、人を欺く売女の道に
 迷い込んではいけません。迷い込んでしまっ、
 売女の残忍な力を嘆いても手遅れです。
 多くの人が殺された場所へ落ちて行くことになるのです。

第411号 1712年6月21日（土曜日）

【アディソン】

私は詩女神たちの秘密の避難所のあたりをさまよい、
 不案内な寂しい場所を探る。
 まず、源泉で私は魅了される、
 汚れない流れで私の渇きをいやす。(ルクレティウス)¹⁾

視覚は感覚の中で最も完璧かつ喜ばしいものです²⁾。はるか遠方の物に対しても、目にすることで実にさまざまな着想が生まれて来ます。そして、恩恵に飽きることなく、影響はいつまでも持続します。触覚は、確かに色彩は別ですが、大きさ、形状、その他目に入るさまざまな着想に対する概念を提供できますが、その働きはどうしても、数量、容積、距離に絞られてしまいます。視覚はそういった欠陥を補うためにあるようで、より精密で広がりのある一種の触覚と考えることが出来るかもしれません。視覚は、無数の人々にまで及び、最大の形状を把握し、宇宙のかけ離れたところにあるものも私たちの手の届くところに引き寄せてくれます。

想像力に着想を与えているのは、この感覚つまり視覚です。その結果、(私はこれを区別しないで用いますが)「想像」ないし「空想」の喜びがあるのです³⁾。ここで私が言いた

1) ルクレティウス *De rerum natura* 1.926-8

2) ケケロ『弁論術について』2.87.357

3) ワーズワスの頃までは、imagination (想像) と fancy (空想) は差異はほとんどなく同意語として

いのは目に見える物から生じるもののことです⁴⁾。実際に目にする、あるいは、絵画や彫刻や叙述などを通して喚起させられる場合がそれにあたります。実際、最初に目から入ってこない限り、私たちはイメージを描くことはできませんが、いったん受け止めたイメージを保持し、変更を加え、混ぜ合わせ、想像力に最もふさわしいさまざまなイメージを喚起させる力を備えています⁵⁾。この能力のお陰で、地下牢に閉じ込められている人でも、自然界で見出されるいかなる光景や風景よりも美しいものを想像できるのです。

英語では、「空想」や「想像」ほど不正確で曖昧な意味で用いられている単語は他にはほとんど見当たりません。この二つの単語は今後の一連の思索で用いるつもりですので、読者に私が取り掛かっているテーマを正しく理解してもらうために、両者の概念を定める必要があると考えました。そこで、想像力の喜びという私の真意はそもそも視覚から生じる喜びであること、そしてまた、私がこの喜びを二種類に区分していることを読者には記憶に留めていただかななくてはなりません。私の意図は、何よりもまず、もっぱら眼前にある物から生じる第一の喜びを、つぎに、実際には見ていないが記憶の中で呼び覚まされるか、存在していないあるいは架空の好ましいイメージに変えてしまう、目に見える物から生じる第二の喜びを論じることです⁶⁾。

想像力の喜びは、どう見ても思慮分別の喜びほど大きくはなく、知性の喜びほど洗練されてもいません⁷⁾。実際、知性の喜びは、新たな知識ないし精神の向上に基づくものですから、より好ましいものとなります。しかし、想像力の喜びは知性の喜びと同じくらい素晴らしく、夢中にさせられるものであることは認めなくてはなりません。美しい景色は、実物に負けにくい程度の喜びを魂に与えてくれます。ホメロスの叙述はアリストテレスの一章よりも読者を魅了します⁸⁾。さらに、想像力の喜びには知性の喜びよりも明白で手に入れやすいという利点があります。目を開けていさえすれば、光景が目に入ってきます。見る人の考えはほぼ無視して、空想に勝手に色付けをします。どうしてだか分かりませんが、見る物の均斉美に圧倒され、その特定の原因や時を考えないですぐさま美しさを認めてしまいます⁹⁾。

洗練された想像力の持ち主は、無教養な人には受け止めることができない実に多くの喜びを受け入れます¹⁰⁾。こういった人は絵画と会話することができ、彫像に愉快的な友を見つけ出すことができます。叙述では密かな清涼剤と出会い、しばしば野原や牧草地の景色に他のものよりも大きな満足感を覚えます。実際、目にするあらゆるものに財産のようなも

用いられた。

4) アディソンはここでは17世紀の哲学に従っている。

5) こういったことが想像力の働きとして長い間認められていた。

6) アディソンが「第一」「第二」という言葉を用いたのは、おそらくロックを意識していたと考えられる。

7) アディソンが、想像力を「感覚」と「悟性」の中間に位置づけたのは、従来の伝統に従っている。

8) アディソンは、もとは「アリストテレスの一章」ではなく「ウェルギリウスの記述」と書いた。

9) サー・ウィリアム・テンブルは、『オランダ共和国』の序文をこれと同様な調子で記した。

10) これは新古典派の批評家がしばしば用いた観点。

のを付与します。そして、この上なく粗野で無教養な人に喜びのために尽力させます。その結果、いわば違った観点から世界を見ることになり、人々一般から身を隠している多くの魅力をそこに発見します。

ほんのわずかですが、怠惰で無垢でいる方法が分かっている、あるいは、犯罪的でない喜びを味わう人はいます。だがどんな気晴らしもなんらかの美德をひとつふたつ犠牲にします。その第一歩は悪徳ないし愚行への入口となります。それゆえ、無事に引き込み、賢人が恥じ入らないような満足感を見つけられるように、無垢な喜びの領域をできるだけ広くするように努力すべきです。想像力の喜びにはつぎのような特徴があります。すなわち、より真剣な活動に必要な思考の適性を求めませんし、官能的な喜びに伴いがちなげやりとか無関心な気持になることもありません。ちょうど能力にとっての穏やかな訓練のように、努力しなくても簡単にものぐささと無為から覚醒させられるのです。

ここで、空想の喜びは、思考の力で生み出され、頭脳の激しい働きが伴う知性の喜びよりも健康的です。自然であれ、絵画であれ、詩歌であれ、喜ばしい光景は心身双方に優しい影響を与え、想像力を鮮明にし磨くのに役立つだけでなく、悲嘆と憂鬱を追い払い、動物精気を快適に働かすことができます。このため、サー・フランシス・ベーコンが、健康についてのエッセーで、読者に詩や景色を処方するのが適切と考えたのです。ベーコンは其中で特に、複雑で難解な探究を止めて、心を素敵で輝かしい物で満たしてくれる歴史や寓話や自然に関する瞑想といった勉強をするように助言しています¹¹⁾。

本日の紙面では、序論のつもりで、現在の企てのテーマである想像力の喜びの概念を定め、考慮すべきこととして、読者にその喜びを追求するようにと推奨しました。次回では、喜びが引き出されるいくつかの源泉について考察したいと思います。

第412号 1712年6月23日（月曜日）

【アディソン】

仕事はこのように分割すれば、簡単になる。（マルティアリス）¹⁾

まず周囲の対象を実際に見ることから生じる想像力の喜びについて考えたいと思います。私の考えでは、喜びはすべて、「巨大なもの」、「類いまれなもの」、「美しいもの」を目にすることに起因しています²⁾。確かに、ある物から生じる恐怖とか嫌悪が、大きさ、新奇さ、あるいは美から生じる喜びを圧倒するようなことがあるかも知れませんが、嫌悪感そのものの中にもこの三者が非常に人目をひき、功を奏するような喜びが混在します。

大きさという場合、ある一つの物の容積だけではなく、物全体としての大きさを意味します。広々とした平原、広大で荒れ果てた砂漠、山々の高い頂、高い岩山や絶壁、広大な海原の景色などがそれに該当します。私たちが心を打たれるのは、光景の新奇さと美では

11) フランシス・ベーコン『随筆』30「健康について」。

1) マルティアリス『警句』4.82.8

2) アリストテレス『詩学』第7章参照。

なく、こうったとてつもない自然の細工の多くに見える荒削りの壮大さのためです。想像力は、ある物に占領されること、あるいは、能力にはおさまり切れないものをつかみとることを好みます。私たちはこういった無限の眺めを見て、心地よい驚きに襲われ、魂は不安ながらも喜ばしい静寂と驚嘆を覚えます。人々は本来、心を抑制するように見えるあらゆるものを嫌います。視覚が狭い地域に閉じ込められ、周囲の壁や山によって締められているときには、心がある種の監禁状態にあると考えてしまう傾向があります。それに比べて、果てしなく伸びている地平線には自由のイメージがあります。そこでは目をさえぎるものではなく、広大な景色を好きなだけ見渡せます。そして、さまざまな物を見ているうちに、われを忘れてしまいます。こういった広々とした未知の景色は空想にとって喜ばしいものです。ちょうどそれは、永遠とか無限についての思索が知性にとって喜ばしいのと同様です。ところで、荒海や星や流れ星で飾られた空や川や森や牧草地で切り取られた広大な風景におけるように、雄大さと結びついた美とか珍しさがあると、喜びが募ってきます。そのときの喜びの根源は複数となります。

どんなものであっても、目新しい、つまり、稀なことは想像力に喜びを引き起こします。なぜなら、魂は心地よい驚きで満たされ、好奇心を満足させ、これまでになかった着想を与えてくれるからです。私たちは往々にして、一組の物に関心を持ち、同じ物を繰り返し見ることにうんざりすることがあります。目新しい、つまり、類いまれなことが生活を変え、しばらくの間、外見の珍しさが気晴らしとなります。一種の清涼剤となり、いつもの平凡な気晴らしに飽き飽きしている私たちを救ってくれるのです。怪物に魅力を感じ、自然の不完全なものにまで喜びを感じるのはこのためなのです。変化を推奨するのもこのためです。変化すると、刻一刻、目新しいものに注意が行き、ある特定の物に長く留まりすぎて消耗するようなことにはなりません。同様に、このことが偉大ないし美しいものを向上させ、二重の楽しみを与えます。木立や野原や牧草地は一年を通してどの季節でも見るのに気持のいいものですが、春先ほど素晴らしいものではありません。春先は、すべてに輝きがあり、しかも、目には新鮮味があり、すべてが新しく生き生きしています。このため、川や水の噴射つまり滝ほど景色を活気づけるものではありません。川や滝では、眺めは絶えず変化しており、刻一刻、目新しい光景が現れます。私たちは、すべてが同じ場所同じ姿で変化しない山や谷を見ているとすぐに飽きてきます。だが、絶えず動いており、見ている人の目から滑り落ちて見えなくなるような物を見ると、気持は少し掻き立てられほっとします。

ところで、美ほど直接魂に入り込んで来るものはほかにはありません。美は直ちに想像力に満足感を浸透させ、巨大なものあるいは稀なものに最後の仕上げをします。初めて美を見つけると、心には内なる喜びが湧いて来て、そこに快活さと楽しみが広がって行きます。おそらく、物によって真の美とか変形というものはないものと思われます。なぜなら、今ぞっと見えるものでも、それ自体は矛盾がないように作られているかもしれないからです。経験的に、それまでのことは無視して、一目見て、美しいとかゆがんでいると断言するようないくつかの修正が加えられているものがあるのを知っています。このように、分

別のある生き物はどんな種でも、美に対する観念はそれぞれ異なっています。それぞれ独自の美に心を動かされるのです。形状も大きさも同じ鳥ほどそのことが顕著なものはありません。オスが求愛するときに、羽一本の色合いを気に掛けて、それ以外には魅力を感じていないのをよく見掛けます。

光り輝く綿毛、誇らしげなとさか、紫色の翼。
鋭い目つきで、自分にふさわしいメスを慎重に探す、
自分と同じ色をしたメスを。オスは、色鮮やかな化け物が
一杯いると思われる森には行かなかった。それらは不自然な愛が
生み出す理解しがたい成果にすぎないのだ。
それゆえ、クロウタドリは黒っぽい配偶者を選ぶ。
サヨナキドリは馴染み深い声でさえずる音楽好きな仲間を選ぶ。
夜の鳥は黒ずんだ翼と緑がかった目で口説き、
灰褐色の恋人に求愛する。美しい種は、親の貞節な愛を口にする。
春になると、森や野原で狂喜乱舞し、父方の色で輝く羽毛を
太陽に向かって広げる。

芸術および自然の作品のいくつかで見出す二つ目の美があります。これは私たち人間に見られる美ほど激しく想像力に訴えかけませんが、密かな喜びとそれを見出した場所あるいは物に一種の愛着を喚起させます。こういった美は、色彩のはなやかさとか多様性、部分の対称や均衡、体の配列や取り合わせ、あらゆるものの単なる混交や一致にあります。自然における荘厳かつ心地よい光景としては、日の出と日の入り時の空に浮かぶものに勝るものではありません。これは場所ごとの雲間に見えるさまざまなまだら模様の光から成り立っています。このため、いつも想像力に専念している詩人たちはほかの話題よりも色彩の表現を多く取り入れているのです。

空想は巨大なもの、不思議なもの、あるいは美しいものを喜び、同じ物にこういった完全なものを見つければそれだけ喜びが募るように、別の感覚の助けがあると新たな満足感を抱くことができます。だから、鳥のさえずりや滝のような連続音は、刻一刻見る人の心を覚醒し、目の前の場所のいろいろな美に注意を向けさせます。したがって、よい匂いが立ち込めると、想像力の喜びは高まり、風景の色合いや新緑までも心地よいものとなります。視覚と嗅覚の二つの感覚がお互いを気に入る、心に別々に入ってくるときよりも一緒になった方が楽しくなるのです。絵画のいろいろな色も、うまく配置されると、お互いを引き立たせ、そこに追加的な美が授けられます。

第413号 1712年6月24日（火曜日）

【アディソン】

その理由はだれも知らないが、

この効能は知れ渡っている。(オウイディウス)¹⁾

昨日の紙面では、巨大なもの、目新しいもの、あるいは美しいものがいかに想像力に喜びを与えるかについて考えましたが、この喜びの必然的な理由を挙げることは不可能です。なぜなら、私たちにはあるものの快不快を見つけ出すのに手を貸すと思われる観念の本性や魂の実体が分かっていないからです。したがって、そういった観点が持てないために、この種の思索で可能なことは、とても心地よい魂の働きについて考察し、適当な項目立てをして、快不快が発生する必然的な理由の追跡ができないまま、何が快で何が不快かを整理することです。

同じ結果となるものは多種多様ですので、「究極的原因」は私たちの考え方によります。究極的原因是最初の考案者の善と知恵を賞賛する大きな機会となっていますので、完全に満足がいくというわけではありませんが、一般的に、ほかのことよりも有益です。

巨大なものに喜びを見出す究極的原因のひとつはつぎのことかもしれません。神は自分以外の何ものも究極的、十分かつふさわしい幸福とはなりえないように、人間の魂をこしらえているのです。したがって、私たちの幸福の大部分は、神のことを瞑想することから生じる、つまり、神はこの瞑想の喜びを魂に与えていますので、自然に巨大あるいは際限のないものへの気遣いに喜びを感じさせているのです。空想で非常に大きな場所を占める物を考えますと、直ちに、とても心地よい心的な動きである賞賛の念が湧いて来ます。その結果、時や場所に制限されず、また、人間の最大の能力を発揮しても理解できない神が創られた自然について熟考するとき、この上ない驚きと敬虔の気持を覚えるのです。

神は目新しいものつまり珍しいものに密かな喜びを添えました。つまり、神は私たちに知識を追求させ、創造の不思議を探らせているのです²⁾。どんな新しい考えも、その獲得に費やした労力への報いとして喜びをもたらしてくれます。そして、そのことが、私たちを新たな発見に向わせる動機となります。神は私たちの種の美しいものを喜ばしいものになさっています。すべての生き物は種を増やし、この世を満たすようにと誘っておられます。非常に注目に値することですが、(不自然な調合の結果である)怪物がいるところでは、その種は同じものを増殖させることはできず、新たな種を創ることもできません。その結果、あらゆる動物は自分たち自身の種の美に誘われない限り、生殖には終止符が打たれ、地上から消えてしまいます。

最後に、神はその他あらゆる物の美しいものを喜ばしいものになさっています。むしろ、美しく見える非常に多くの物を創られています。すべての創造物を陽気かつ楽しいものになさっているのです。神は私たちの周囲のほぼすべてに想像力を喚起させる力を与えておられるのです。そのため、私たちは神の作品を目にすると、冷やかかまた無関心ではられません。数多くの美を見ると、密かな満足感、充足感といったものを覚えないわけに

1) オウイディウス『変身物語』4.287

2) セネカ『対話』8.5.3

はいきません。物事をそれ自体の形状や動きだけから見ると、お粗末なものとししか見えません。宇宙に余分な飾り（光や色彩がこれに該当しますが）が付与され、想像力によって心地よいものになっていなかったら、私たちに物自体にはない数多くの着想を煽っている理由が分かりません。至る所に、楽しい光景や幻影があります。天や地上に想像上の光輝があります。すべての創造物に降り注がれる架空の美があります。だが、自然から色が消え、そして、光と影の区別が消えてしまったら、実にひどいことになってしまいます。要するに、私たちの魂は今は心地よい錯覚に陥って没頭し戸惑う楽しみを味わい、ロマンスに登場する魔法にかけられたような英雄のように歩き回っています。そして、美しい城や森や草地を見、同時に、鳥のさえずりや小川のせせらぎに耳を傾けています。だが、密かな呪文がとけると、素敵な場面は崩壊し、絶望的な騎士は不毛の荒野あるいはひとつこ一人いない砂漠に突っ立っているのです。魂が受け止めるイメージという観点からみれば、おそらく、離脱直後の魂の状態はこれに似たものと言えます。確かに色彩という観念は想像力によって非常に喜ばしく美しいものであり、魂から色彩が奪われることはないでしょうが、色彩は今は目にさまざまな印象を与えていますので。魂からすると何か別の特別な理由で掻き立てられていると考えます。

読者は例の素晴らしい現代の発見はよくご存知と思います。この発見は自然哲学の探究によって現在広く認められています。すなわち、想像力によってとらえられる光と色彩は、心的な観念に過ぎなく、物質に備わっている属性ではないということです³⁾。これは現代の多くの哲学者たちから議論の余地がないものとされている真理であり、確かに自然哲学での素晴らしい思索のひとつですので、わが国の読者がこの考え方を詳しく知りたい場合は、ロック氏の『人間悟性論』第2巻第8章をご覧くださいけるとそのことが分かるかもしれません。

第414号 1712年6月25日（水曜日）

【アディソン】

ひとつひとつはそれ自体空虚だが、
つながっていると私は確信する。合わさった力は強烈で、
互いに味方だと認め合っている。（ホラティウス）¹⁾

想像力を楽しませる資格があるものとして、自然および芸術作品を考えてみますと、自然の作品に比べて、芸術作品は大きな欠陥があると思います。芸術作品は時折美しいあるいは不思議と見えるものがあるかもしれませんが、見る人の心にとっても大きな楽しみを与える広がり、大きさといったものを持つことができません。芸術作品は自然の作品と同じように洗練かつ優美にはなれますが、自然の作品ほど堂々としてかつ畏敬の念を起こさせ

3) ロック『人間悟性論』第2巻第8章。

1) ホラティウス『詩の技法』410-11

る構想を持つことはできません。自然の何気ない素描にも、芸術の細かい筆致や飾りつけよりも大胆で見事な何かが見え隠れします²⁾。非常に堂々とした庭園や宮殿の美は、狭い範囲に限られており、想像力はすぐに行き渡ってしまい、満足させてくれる何か別のものを要求しますが、自然の広大な野原の場合は、視覚は閉じ込められることなくあちこちさまよい、何の制限も加えられることなく無限のさまざまなイメージが与えられます。このため、詩人はいつも田舎の生活を好むのです。田舎では理想的な自然があり、想像力を喜ばすあらゆる景色があります。

各々の作家は町を嫌い、森を是とする。(ホラティウス)³⁾

静いに苛立つこともなく、騒音にかき乱されることもなく、
田舎の王は平穏な王国を満喫する。
ひんやりとした洞窟、絶えず水の流れている湖、
草地に咲き誇る花々、谷間を滑るように流れる小川、
安らかな眠りを誘う木蔭、つらい日々の終わった後
訪れる夜の穏やかな睡眠が。(ウエルギリウス)⁴⁾

ところで、自然の光景には人工的な光景よりも楽しいものがありますが、自然の作品は芸術作品に似れば似るだけ喜ばしいものとなります。なぜなら、両者が似た場合には、喜びは、二重の基準、つまり、目に映るその物の心地よさとはかの物との類似性の二重の基準から生じるからです。二つの美を吟味することだけでなく比較することに喜びを覚えます。そして、写しと原物の双方を私たちの心に描くことができます。したがって、私たちが、うまく配置され、野原や草地や森や川がちりばめられている景色に、時折大理石の石目や岩や洞窟の奇妙な雷文細工に見られる木や雲や町の、要するに、いわゆる偶然の作品の結果と思える多様性あるいは規則性を持ったあらゆる偶発的な風景に、喜びを見出すのはこのためなのです。

もし自然の生産物が、芸術作品に似ている度合いによって価値が高まるのだとすれば、人工的な作品が自然の作品との類似性から大きな利点を受けるのは確かなことであるかもしれません。私がこれまでに目にした最も素敵な風景は、一方が航行可能な川、もう一方が公園に面した暗い部屋の壁に描かれたものです⁵⁾。光学ではこの実験はごくありふれています。そこでは強烈で自然な色合いの波やうねりがあり、片隅に船が見え、次第にその船が進んでいくのでした。もう一方の壁には、風を受けてあちこちにゆれる緑の木蔭と壁

2) 自然と芸術の反立については、A. O. ラブジョイ「美的規範としての自然」参照。

3) ホラティウス『書簡詩』2.2.77

4) ウェルギリウス『農耕詩』2.467-70

5) アディソンはおそらく「暗箱」camera obscura (カメラオブスクラ) のことを念頭においていたと考えられる。この暗箱はグリニッジ公園にあった。

を飛び跳ねる小型の鹿の群れが映るのです。正直言って、この光景の新奇さは想像力に喜びを与えるひとつの契機かもしれませんが、きっとその主な理由は自然との近似性なのです。なぜなら、これは他の絵画と同様に、色彩と形状だけでなく動きがあるからです。

以前に、一般的には芸術の珍奇さよりも自然の方に壮大で畏敬の念を起こさせるものがあると述べたことがあります。そこで、どうみても真似事だという場合には、入念で正確な芸術の作品よりも自然の作品に、気高く高揚した喜びを得ることになります。このため、わが国の庭園は、フランスやイタリアの庭園ほど面白くないのです⁶⁾。フランスやイタリアの庭園は、至る所に、わが国の整然とした優美さよりもはるかに魅力的な人工的な粗雑さを示す庭と森が快適に混在しているのです。確かに、国のあちこちで人々が住み、耕してきた牧草地や耕作地を遠ざけてしまうのは、人々のためにもならないし、個人にとってもためになることではないに違いありません。しかし、どうしてすべての土地に植え付けをして、所有者の喜びだけでなく利益となる一種の庭園にしていけないのか。ヤナギの木が一面に生えている湿地や檜の木が木蔭を作っている山は、むき出しで何もないよりも美しいだけでなく有益です。小麦畑は気持ちのいい眺めですし、散歩道の両側に広がる畑に目をやりますと、草地にある自然の飾りに少し手を入れて改良すれば、また、生け垣も何列かその土地が受け入れられるように木や花を植えて引き立てれば、素敵な風景が自分にふさわしいものになるに違いありません⁷⁾。

中国のことを伝えている著者たちによれば、中国人は厳密に配置されているわがヨーロッパの植栽を笑っているとのこと。その理由は、彼らに言わせると、木々を列も均等にし、形も一様に行っているからということです⁸⁾。どちらかと言えば、中国人は自然をそのまま残そうとし、絶えず人為的にならないようにしているというわけです。中国語には最初目にしたときに想像力に訴えかけてくる植栽の独特の美を表現する言葉があるようです。そのとき、何がこれほど心地よい効果を生み出しているのか明らかにはしないのです。それに対して、わが国の庭師たちは、自然に同調するのではなく、できる限り自然から逸脱しようとし、わが国の木は円錐や球状やピラミッド形に伸びます。あらゆる植物や灌木にはさみの痕跡が伺えます。私の考えが風変わりなのかどうか分かりませんが、私としては、枝が剪定されて数学的な形状になっているよりも、茂って拡散しているのを見る方が好きです。非常に洗練された庭にある迷宮よりも花をつけた果樹の方が大いに楽しく見えると思わざるを得ません。わが国の造園業者のところには売却できる植物の宝庫がありますので、彼らがふんだんに在庫を抱えている常緑樹や同様の可動性植物を処分するとき、美しい果樹をすべて掘り起こし、自分たちの利益になるプランを立てるのはごく自然なことなのです。

6) アディソンは、ウィリアム3世の頃にオランダの影響で作られたイギリスの庭園とフランスやイタリアの私的な庭園（ヴェルサイユの庭園ではなく）を比較している。

7) 当時のイギリスの庭は、果樹や野菜や花が混在していた。サー・ウィリアム・テンプル「エビクロスの庭について、1685年」参照。

8) この叙述の元になっているのは、明らかにサー・ウィリアム・テンプルの「随想」。

第415号 1712年6月26日(木曜日)

【アディソン】

つぎに、贅沢な労働者と途方もない組織を抱えた、
輝かしい名前を持つ私たちの都市を加える。(ウェルギリウス)¹⁾

すでに空想がいかに自然の作品によって影響を受けるかを明らかにし、引き続き自然および芸術作品一般について考察し、見る人の心を喜ばす場面や光景を形作るとき、双方がいかに助け合い競い合っているかについて述べましたので、本紙では、ほかの何ものにもまして、これまでのテーマだった想像力の第一の喜びを即座に生み出す例の特別な技術について考えてみたいと思います。私の言っている技術とは建築のことです。これについては、偉大な建築の大家たちが定め、数多くの論文で詳細に説明しているルールや原理には立ち入らずに、前述の思索に見合った観点からのみ取り上げてみたいと思います。

建築作品における巨大さとは、建造物の容積および本体、あるいは、建てられる様式に関わると考えることができます。建造物に関しては、現代よりも古代とりわけ東方の国々の方が非常に優れています。

バベルの塔は言うまでもありません。ある昔の著者によると、当時はまだ土台があり、まるで雄大な山のようなことでした²⁾。バビロンの城壁³⁾、吊り庭、そしてゼウス・ペロスの神殿⁴⁾ほど気高いものはありません。バビロンの塔は八層からなっており、各層が1ファースト(約200メートル)で高さは1マイルになり、頂上には望楼がありました。同様に、私はここで、そばの小さな岩は属国の諸王なのだが、セミラミス像になっている巨大な岩に注目します⁵⁾。そして、ユーフラテス川の水を取り入れる巨大な水盤、つまり、人工の湖を作ったのです。これは新たな運河ができるまで使用され、川には堀を何箇所かに設けたのです⁶⁾。こういった不思議な建造物を架空だと見なしている人たちがいるのは分かっていますが、現在そういった作品がある限り、私はこれに疑いを差し挟む根拠はないものと思います。実際、当時そしてその地方では、建造物にはそれ以来遭遇する

1) ウェルギリウス『農耕詩』2.155

2) 本号の材料はほぼヘロドトスとディオドロス＝シクロスによる。

3) ヘロドトス『歴史』1.178「バビロンがどのような町であるかという、それは広大な平野の中にあって四角形を成し、各辺の長さは百二十スタディオンある。従って町の全周は四百八十スタディオンである。バビロンの町の規模はこんなに巨大なものがあるが、バビロンはまた、われわれの知る限り他に類のないほど美しく整備された町でもある。まず満々と水をたたえた深く広い濠が町の周囲にめぐらされ、つづいて厚さ五十王ペキュス、高さ二百ペキュスの城壁が町を囲んでいる。」(松平千秋訳、岩波文庫)。「吊り庭」はディオドロス＝シクロスによると、作ったのはセミラミスではなく、後のシリア王とのこと(『歴史選集』2.10.1)

4) セミラミスは町の中心にゼウス神殿を建設した。バビロンの人々はこれをペロスと呼んだ。(ディオドロス＝シクロス『歴史選集』2.9.4、ヘロドトス『歴史』1.181)

5) ディオドロス＝シクロス『歴史選集』2.13.2

6) セミラミスは平原に濠を築いたが、ユーフラテス川の流れを変えたのは第二代の女王ニトクリスだった(ヘロドトス『歴史』1.184-5)。

利点よりも大きな利点が数多くあったのです。地上はとても実り豊かで、人々は一般に牧畜で生活をしていました。牧畜は農業よりも人手ははるかに少なくですんだのです。人手を要する仕事はほとんどなく、投機的な人に仕事を提供する技術も科学もほとんどなかったのです。そして何よりも、君主は絶対的でした。そのため、君主が戦争に赴くときには、君主自らが人々の先頭に立ちました。300万人を戦場に率いたセミラミスは敵軍の数に圧倒されたのです⁷⁾。それゆえ、セミラミスが平穏時に、建築に思いを向けたとき、これだけの数の労働者を使って素晴らしい作品を仕上げるのができたのも何ら不思議ではありません。おまけに、この地方の気候では、北国の人たちが半年無為に過ごさなくてはならない寒い冬に妨害されることはほとんどありませんでした。また、気候の恩恵に加えて、史家が言うには、アスファルトつまり自然がもたらす一種の漆喰が取れたのです⁸⁾。おそらくこれは聖書に登場するものと同種のものであり、バベル建造に資したのです。「彼らは、しっくい代わりに、アスファルトを得た」⁹⁾のです。

エジプトには、今もなおピラミッドがあります。このピラミッドは作られた記述に一致しているのです。全土を覆い、地域によっては100もの神殿を配置させていた迷宮の遺跡を旅人が見つけ出すに違いないと思います¹⁰⁾。

中国の城壁はこういった壮大さを示す東洋の一例です。これは世界地図でも目立っています。もっとも、城壁そのものが現存していなかったら、架空のものと考えられたに違いありませんが¹¹⁾。

世界の国々をより魅力的にしている壮大な建物に対する専念を有り難く思います。この専念が人々を神殿や教会の建設に取り掛からせたのです。こういった壮大な建物は、壮大さによって、神性をもたらしただけでなく、途轍もないこういった作品が、同時に、心を開かせ広漠たる観念へと結びつけ、その場で神との対話を可能にしているのです。なぜなら、堂々として威厳のあるものは、見る人の心に畏怖と崇敬の念を刻み込みますし、生来の魂の大きさと一致しているからです。

つぎに、建築における様式の大きさについて考えます。これは想像力に非常に大きな影響力を持ちますので、一見小さな建物でも、様式がありふれているか弱いそれよりも20倍の大きさの建物より気高い印象を与えることになります。そこでおそらく、フィディアス¹²⁾の提案に従って、右手に川、左手に町の英雄像が刻まれていたら、実物大よりも小さいのですが、リュシッポスのアレクサンドロス像¹³⁾の荘厳な雰囲気の方が、アトス山より

7) ディオドロス＝シクロス（『歴史選集』2.17.1）によると、軍隊は歩兵3百万、騎兵20万、2輪戦車10万台だったとのこと。

8) ヘロドトス（『歴史』1.179）によると、土から煉瓦を作り、モルタル代わりに熱したアスファルトを用いたとのこと。

9) 『創世記』第11章第3節。

10) ディオドロス＝シクロス『歴史選集』1.61.2, 1.66.3-6

11) サー・ウィリアム・テンプル「英雄的美徳について」

12) プルタルコス（『アレクサンドロス伝』4.1によると、こういった点がアレクサンドロスの人柄を最もよく表しているとのこと。

も人々を驚かしていたに違いありません。

初めてローマのパンテオンに入ったときの気持を考えて見て下さい¹⁴⁾。想像力は荘厳さと驚嘆で一杯になります。同時に、これよりも5倍の大きさがあっても、ゴシック様式の大聖堂の内部ではほとんど何も感じないのです。一方には様式の大きさ、他方には貧弱さしか感じることはできません¹⁵⁾。

私が大いに気に入っていますあるフランスの著者がこの件について触れているのを見かけたことがあります。フレアール氏の「古今の建築対比」¹⁶⁾がそうです。読者には、彼が使用したのと同じ用語を使って説明したいと思います。彼はつぎのように語ります：私の考えではとても奇妙なある物を見えています。表面の大きさが同じでも、一方の様式は崇高で荘厳に、もう一方は貧弱で取るに足らないように見えることがあります。その理由は洗練されていてありふれてないということです。要するに、建築に様式のこの壮大さを持ち込むためには、様式の主要部分の区切りはごく少なくしなくてはなりません。レリーフ（浮彫り）や突出部はすべて崇高で大胆なものにすべきです。取るに足らぬ貧弱なものを見せなければ、想像力は眼前の作品に深く感動するものです。例えば、コーニス（天井蛇腹）では、蛇腹上部や笠木や軒蛇腹や歯飾りの線形あるいは反曲線形が、優美な突出によって気品を見せていると、小さな穴や玉縁の円形線形や私には分からないその他いろいろな細部を作った結果生じる乱雑な印象（こういったものは壮大な作品に一切効力を発揮せず、主要部分にとってまったく無駄なのですが）がなければ、確実に荘厳で崇高に見えます。それに対して、過剰なまでに小さな飾りを施している場合は、これは視線を拡散させ、数多くの光線に惑わされることになり、全体が乱雑にしか見えなくなります。この場合は貧弱な印象しか与えないのです。

建築における形状の中では、凹凸ほど強烈な雰囲気をかもし出すものはほかにはありません。遠く離れた中国でも、近隣の国々でも、古今の建築には円柱や丸天井が華麗さと荘厳さを考えたものが建物の大部分を占めていることが分かります。それはほかの物よりも身廊にその理由があるからだと思います。確かに、身廊の形状によっては外観の3分の2が目に入ってくるものがありますが、視覚がいくつかの天使に分散してしまう身廊では、一樣の印象ではなく、似たような印象が拡散してしまいます。丸天井の外部を見ると、目は半周します。内部を見ますと、ひと目で全体を捉えます¹⁷⁾。すぐさまくぼみ全体が目に入り、視覚は周線を集めている中央部に向かいます。四角い柱では、目には外観の4分の

13) フィディアスはスタシクラテスの誤り（「アレクサンドロス伝」72.4 リュシッポスは紀元前4世紀のギリシアの彫刻家。

14) アディソンが初めてローマを訪れたとき、とりわけ関心を示したのがパンテオンとサンピエトロ大聖堂だった（「イタリアの感想」1705）。

15) アディソンは、「イタリアの感想」で、ゴシック様式の教会と比較して、サンピエトロ大聖堂を賞賛した。

16) ローラン・フレアールのこの著は、1664年にジョン・イーヴリンが英訳した。

17) サンピエトロ大聖堂のドームについて、アディソンは「見上げると、丸天井の広い空洞に驚く。周囲がすべてアーチ形になっていて、これほど美しい眺めはない」と記した（「イタリアの感想」）。

1しか入らず、四角い凹面では、内部すべてを見渡すには目をあちこちに移動させなくてはなりません。このため、空想は四角とかその他の形よりも、アーチ形で入って来る広々とした空中および空を見ることによって限らない感動を覚えるのです。虹の場合、その色彩が美に貢献していますが、その形状が同様に荘厳さに貢献しているのです。このことは、シラクの子イエスが極めて詩的に述べている通りです「虹をご覧ください、これを作られた方を褒め称えなさい。実に美しく輝いている。輝かしい円を描いて空を囲んでいる。いと高さ方の両手がこれを曲げているのです」¹⁸⁾。

心を感動させる建築の大きさについて語りましたので、つぎは、建築における目新しくかつ美しく見えるものから生じる想像力の喜びについて明らかにしたいと思います。私がこれまで見て来たことよりも、見る人には当然、目に見える建造物の理想についてしっかりした審美眼がありますので、この点については読者をこれ以上煩わすつもりはありません。私の現在の目的からすれば、想像力の喜びを与えるものとしては、巨大なもの、稀なもの、あるいは美しいものに勝るものはないのだと言っておくだけで十分です。

第416号 1712年6月27日（金曜日）

【アディソン】

なぜなら、心に思い描いている物は

目で見る物の結果なのだから。（ルクレティウス）¹⁾

私は最初に、想像力の喜びを実際に目の前にあるもの、つまり、目に入って来たものから生じるものと、かろうじてその作用から自分自身とは直接関係のない彫像とか記述のようなものに出会った際に、後から思い起こさせられるものから生じるものに区分しました。すでに第一の区分については考えましたので、もう一つの点について考えたいと思います。両者を区別するために、後者については私は想像力の第二の喜びと呼んでいます。彫像や記述といったものから受け取る着想が実際に目にしたものと同じだと言うとき、刻まれたり述べられたりしている場所とか行為とか人物をかつて目にしたことがあると解釈してはいけません。一般に、表現されているものと類似点、あるいは、少なくともわずかに似通った点がある場所や人物や行為を目にしていれば十分なのです。なぜなら、想像力がいったん特定の着想を貯えてしまいますと、想像力はそれを自分の喜びに合うように勝手に拡大し、合成し、修正しますので²⁾。

表現にはさまざまな種類がありますが、中でも彫像が最も自然で、表現される物と近似の物を提供します。一般的な例証を用いるために、生まれながらにして盲目の人にある像を両手に持たせ、その彫刻の溝やくぼみを指でたどらせてご覧ください。そうすると、その人は人物なり獣がどんな形で表現されているか容易に理解します。だが、凹凸がなく一樣な

18) 『ベン＝シラの知恵』第43章第11節。

1) ルクレティウス *De rerum natura* 4.750

2) 想像力の結合的な力は長く認められてきた。

絵画に手を当てさせて見ると、凹凸もいびつもない平らなキャンバスに描かれている人体の突出物や凹みは想像することはできません。記述の場合は、絵画よりももっと表現するものから遠ざかります。なぜなら、絵画は原物と真に迫った類似性があるからです。絵画には文字や音節はまったく欠けています。色彩はあらゆる言葉を喋りますが、言葉はその国の人には分かりません。このため、必要性から人々はいち早く話し言葉を見つけ出したのですが、書くことが考え出されたのはおそらく絵画より遅かったのです。とりわけ、つぎのようなことが伝わっています。アメリカで、スペイン人が初めてその地に辿り着いたとき、メキシコ皇帝に絵の速達便が届けられたのです。スペインの便りを鉛筆で描いたのです。これは筆記よりも自然な方法です。もっとも、この方法では、話し言葉の持つこまかな脈絡を描くことも、接続詞や副詞の絵を描くこともできませんので、随分不完全なものでしたが。目に見える物をそれに添えられている観念が伴わない音によって表現し、音楽における記述のようなものを製作することはもっと奇妙なことになります。確かに、人為的な作曲によって想像力が喚起する自然に対する概念は、混乱し、不完全なものとなります。音楽界の巨匠は、聴衆を白熱した戦闘の中に巻き込むことも可能ですし、死と弔いの陰惨な場面や不安に陥れることも可能ですし、喜ばしい木立ちと理想郷の夢を見させることも可能です。

以上の例では、想像力の第二の喜びは心の動きから生じるものであり、原物から生じる着想とそれらを表す彫像や絵画や記述、あるいは音から生じる着想とを比較しているのです。この心の動きに、私がこれまで述べて来た³⁾ような喜びがなぜ伴うのかその必然的な理由を挙げることは不可能です。だが、この一つの根源から引き出される楽しみはいろいろあります。なぜなら、これが私たちに彫像や絵画や記述の面白味を提供するだけでなく、模倣の行為や技術に喜びを見い出させているからです。私が以前に示したように⁴⁾、これが着想の類似点を持つある種の機知を喜ばしいものに行っているのです。さらにまた、これが偽りの機知にも時折小さな満足感を覚えさせているのだと付け加えることができます。偽りの機知というものは、アナグラム（語句のつづり換え）やアクロスティック（文字謎）における文字の類似性、へば詩の韻や反復における音節の類似性、地口における単語の類似性、文全体あるいは詩の翼や祭壇との類似性にあるのです。おそらく、喜びと心の動きを結びつける究極的原因は、私たちに真理の探究をさせるためだったのです。なぜなら、二つのものを見分けること、そして、両者の差異を正しく識別することは、全面的に、両者を比較し、自然の作品の間にある一致ないし不一致を認められるかどうかにかかっているからです。

ところで、ここでは言葉によって引き起こされる着想から生じる想像力の喜びに限定したいと思います。なぜなら、記述に同意する意見の大半は、絵画や彫刻に同じように当てはめることができるからです。

3) 第413号参照。

4) 第62号参照。

言葉は、うまく選ぶと、その言葉にとっても大きな力が備わりますので、記述は物自体を目にするよりも生き生きとした着想を与えます。読者は、力強い色で描かれた光景は実際に目にするよりも言葉で説明されている方が想像力には実物そっくりに見えることに気づきます⁵⁾。この場合、その詩人は自然をうまく捉えているように思えます。実際、自然を真似ているのですが、そこにもっと迫力のある筆致を添え、美を増しているのです。そして、作品全体に活力を与えますので、表現から生じる着想と比べると、物自体から生じる着想が弱々しく見えます。その理由はおそらく、なんらかの物を見た場合、想像力には目に入って来たものしか描かれないためです。ところが、記述の場合は、詩人はある物について好きなように自由に書き、私たちの気のつかなかった、つまり、最初に目にしたとき私たちの目に入って来なかったいくつかの部分について明らかにしてくれます。私たちがなんらかの物を目にすると、それに対する私たちの着想は、おそらく、二つないし三つの単純な着想に基づきます。だが、詩人の場合は、もっと複雑な着想、あるいは私たちの想像力に影響を与えるようなことだけを提供してくれます。

言語に精通しており、言葉の意味が分かっている読者が、それにもかかわらず同じ記述であっても異なった味わい方をすることがあるのはどうしてなのか検討して見る価値があるかもしれません。一節を読んで夢中になる読者もいれば、冷淡かつ無関心でいられる読者もいるのです。つまり、描写が極めて自然であると考えた読者もいれば、類似性も一致も何もないと考える読者もいるわけです。こういった嗜好の違いは、読者の想像力に差があるためからか、同じ言葉であっても解釈の仕方が異なることからかのいずれかから生じるに違いありません。真に味わい、記述を正しく判断するためには、生まれながらにして優れた想像力を備え、何が意味があり何を表しているかを識別できるように、言葉の持つ力とエネルギーを、そしてまた、言葉が他の言葉とつながることによって可能になる付加的な力と美を、十分に考慮しなくてはなりません。外部の物から受け取ったイメージの印象を保持するために、空想に活力が与えられるに違いありません。言葉を最大限に飾り立てるためにはどんな表現が最適であるか見分けるのは判断力の仕事です。この二点が欠けている人は、記述の一般的な概念は受け止めることができるかもしれませんが、記述の持つ独特の美をはっきりと見分けることはできません。目の見えにくい人は眼前の場所に対しては、部分にまで入り込まず、輝き申し分のない色彩の多様性を見分けることはなく、曖昧な景色を見ることになります。

第417号 1712年6月28日（土曜日）

【アディソン】

優しいムーサが寛大な表情でその生誕を眺める若者は、
馬上試合場の矢来で異彩を放つこともなく、

5) アディソンは、『農耕詩』について論じ、この点がウェルギリウスの名人芸だと述べたことがあった(1694年)。

オリンピックの栄冠を勝ち取ることもない。
 だが、ティブルの小川や青々とした林間の空き地や、
 水の澄んだ泉や薄暗い木蔭は、決して絶えることのない
 歌が満ち溢れ、不朽の賞賛によって報われる。(ホラティウス)¹⁾

以前に見たことがあるたった一つの事柄が、しばしば心象の全体像を奮い立たせ、それまで想像力の中で眠っていた無数の着想を覚醒させると言うことができるかもしれません。ある特定の匂いとか色彩が、突然、心を最初に出会った野原や庭で満たし、かつてのさまざまなイメージを蘇らせることができるのです。私たちの想像力はそれが手掛かりとなり、思いがけなく町とか劇場とか平原とか草地へと導かれます。さらに、空想が以前に目にした光景に思いを馳せますと、最初喜んで目にした光景はよく考えてみるとさらに喜ばしく思えて、その記憶が原物の喜びを増大させると言うことができるかもしれません。デカルト主義者ならこれについてつぎのように説明するでしょう。

ある景色や庭から得た一組の印象は、心の中に入り込み、頭脳に互いに近接する一組の痕跡を残します。それゆえ、一つの印象が想像力で蘇って来て、その結果、動物精気が流れ出しますと、この精気が活発に動いて、一つの痕跡だけでなくその周辺のいくつかの痕跡にぶつかります。このようにして、同じ組にある別の印象を覚醒させ、それが直ちに新たな精気を発動させます。そしてついには一組の印象がすべて吹き始めて、想像力の中に景色なり庭の全貌が見えて来るのです。場所から受け取る喜びはそこにあるささやかな不快感に打ち勝ちます。喜びの痕跡が通る道は広く、不快の痕跡が通る道は狭いので、この狭い道は素早くふさがれ、動物精気を受け入れることができず、その結果、記憶の中で不快な印象を喚起させることはできなくなるわけです。

事物を想像する力がより完璧な魂から生じるのか、人によって異なる頭脳の微妙な組織から生じるのか、これを問うても無駄です。しかし、気高い著者は生まれながらにしてこの能力をふんだんに備えており、外部の物から真に迫った印象を受け止めることができ、印象を長く保持することができ、時に応じて、その印象を組み合わせ、読者の空想にぴたりと合う形状や表現にすることができるのは確かなことです。哲学者は悟性を啓発することに努力しますが、詩人は想像力を鍛えることに努力すべきです。詩人は自然の作品を正當に味わい、田園生活のさまざまな光景に余すことなく精通していなくてはなりません。

田舎のイメージが詰め込まれ、牧歌や低級な詩ではおさまらなくなった場合は、宮廷の華やかさと荘厳さに精通すべきです。芸術作品を生み出すには気高く堂々としたものにはすべて精通しなくてはなりません。それが絵画や彫像、現在栄光に包まれている建築作品やこれまでに栄えた廃墟であっても同じことが言えます。

上述の利点は、心を開き、想像力を高めるのに役立ちます。そこで、著者が正しく利用する方法が分かっている話ですが、あらゆる種類の著述に影響を与えます。この才能

1) ホラティウス『頌詩』4.3.1-4, 10-12

に秀でている学識のある人たちの中で、最も完璧な人はいくつかの種類をあげてみると、おそらく、ホメロスとウェルギリウスとオウィディウスということになるでしょう。ホメロスは偉大なるものに、ウェルギリウスは美しいものに、オウィディウスは不思議なものに、それぞれ素晴らしい想像力を発揮します。『イーリアス』を読むことは、無人の国を旅しているようなものです。ここでは、空想は広い未開の沼地や巨大な森林や奇形の岩や絶壁のある広大な砂漠が広がる無数の荒涼とした景色を楽しむことができます。それに対して、『アイネーイス』は整然とした庭を散策するようなものです。ここでは、どこか装飾のない箇所を見つけることは不可能です。つまり、どの場所を目にしても必ず何か美しい植物か花があります。一方、『変身物語』の場合は、魔法にかけられた大地を歩くことになり、目に入って来るものはどこも魔術の光景です。

ホメロスが戦闘とか群衆を物語るときにはいつも英雄か神が登場します。ウェルギリウスは理想郷つまり楽しい光景を描写することを好みます。一般に、ホメロスの表現は偉大なるものを、ウェルギリウスは心地よいものを際立たせます。『イーリアス』第1書に登場するゼウスほど崇高なものはほかにはありませんし、『アイネーイス』第1歌に登場するウェヌスほど魅力的なものもほかにはありません。

こう言って、か黒の眉にクロノスの子が うべない^{こうべ}首を下げれば、
香ぐわしい神髪は、それ、不死なる御神の ^{かしら}頭よりさっとばかりに
垂れなびくと見え、オリュンポスの ^{おおね}大峰をおどろと揺すった²⁾。

こう言って向きを変えと、薔薇色のうなじが輝いた。
神々しい髪は頭の頂から天上の芳香を放ち、
衣服は足の先まで垂れて、その歩みはまぎれもなく
女神であることを明かした³⁾。

ホメロスの描く人物は大半が神のような恐るべき人物です。ウェルギリウスは彼の詩に美しくない人物はほとんど登場させませんし、とりわけ、英雄は美しくなるように配慮しています。

そのように美しい髪を母神が息子に与え、青春の照り映える
赤みと喜ばしい目の輝きを吹き込んでいた⁴⁾。

要するに、ホメロスは読者に崇高な考えを注ぎ込みます。そして、私が思うに、後世の優れた詩人たちの想像力を奮い立たせているのです。ホラティウスだけ例に挙げたいと思

2) 『イーリアス』 1.528-30

3) 『アイネーイス』 1.402-5

4) 『アイネーイス』 1.590-1

います。ホラティウスは『イーリアス』とか『オデュッセイア』の一節にヒントを得るとすぐに燃え上がり、いつもホメロスのことを考えて自分自身を超越してしまいます。ウェルギリウスは、『アイネーイス』において、主題が受け入れることができる喜ばしい光景はすべて描写します。そして、『農耕詩』では、野原や森や家畜の群れやハチの群れからなるとても楽しい風景を山ほど提供してくれます。

オウィディウスは、『変身物語』において、想像力が不思議なものに影響されることを明らかにしています。彼はどの物語でも奇跡を描き、結末では必ず何か新しい生き物が登場します。彼の技巧は主として最初の姿が完全に消えてしまわないうちに、新しい姿を完成させるという時宜を得た描写にあります。その結果、私たちは至る所でそれまで見たこともない何かを楽しめますし、『変身物語』が終わるまで、怪物がつぎからつぎへと登場するのです。

想像力に関してこういった技巧をすべて完全に修得している詩人を挙げるとすれば、私はミルトンがその一人だと思います。もし『失樂園』がこの点で『アイネーイス』や『イーリアス』の域に達していないとしたら、それはミルトンの才能不足というよりも用いている言語の欠陥なのです。英語で書かれた神聖詩というものは、レンガ造りの堂々とした宮殿のようなものです。材料は粗雑でも、大理石造りの宮殿と同じくらい立派な仕上げとなっています。ところで、現在のテーマから考えて見ますと、天使たちの戦い、救世主の荘厳さ、悪魔とその仲間たちの資質と言動ほど崇高なものは思いつきません。伏魔殿や樂園、天国やアダムとイヴほど美しいものもありません。世界の創造や墮天使たちの変身、さらには首謀者が樂園探究で遭遇する驚くべき冒険ほど不思議なものはありません。想像力を喚起させるこれほど適切な光景を提供している詩人はいません。ほかのどのような詩人でもこういった光景をこれほど力強く生き生きとした色彩で描くことはできなかったことでしょう。

第418号 1712年6月30日(月曜日)

【アディソン】

とげの代わりにミルラ(没薬)を生長させる。(ウェルギリウス)¹⁾

想像力の第二の喜びは、視覚と結びつくというよりもっと幅広く普遍的なものとなります。なぜなら、偉大なもの、不思議なもの、あるいは美しいものだけでなく、見た目に不快なものも適切な記述があれば喜ばしいものとなるからです。それゆえ、ここでは喜びの新しい原則を探る必要があります。これはほかでもない言葉から生じる観念と物自体から生じる観念を比較する心の働きです。そこで、なぜこの心の働きに、これまで考えて来たほどの喜びが伴うのかその理由を探る必要があります。そのため、牛糞の山の記述も適切な表現で示されるなら、想像力にとって喜ばしいものとなります。もっともこれは空想と

1) ウェルギリウス『エクロガエ(詩選)』3.89

いうよりも悟性の喜びと呼んだ方が適切かもしれません。なぜなら、私たちは、イメージを喚起させる記述の適切さの場合ほど、記述に含まれるイメージには喜びを覚えないからです。

小さいもの、ありふれたもの、あるいはゆがんだものの記述が、想像力に受け入れられるとしたら、偉大なものや驚くべきもの、あるいは美しいものの記述の方が想像力にとってははるかに受け入れ易いものです。なぜなら、描写されたものと原物の比較が楽しいだけでなく、原物そのものに大きな喜びを覚えるからです。私が思いますに、大半の読者はミルトンの場合、地獄の描写よりも楽園の描写により魅了されます。地獄の場合も楽園の場合も、質的には等しく完璧なのですが、想像力にとっては、一方の硫黄はもう一方の花の床や芳香の漂う荒野ほどすがすがしくはありません。

ほかの何ものよりも記述を奨励するもう一つの事柄があります。読者の心に密かな興奮を掻き立て、情念に強く働きかける物を描写する場合がそうです。この場合、私たちは興奮もしますし、啓発もされます。その結果、喜びはより普遍的になり、いくつかの点で私たちに喜ばせる資格を持つことになります。したがって、絵画の場合、肖像が正確に反映されている顔の絵を見るのは楽しいことです。それが美しい顔の絵であれば喜びは増します。また、憂鬱とか悲しみの表情で美しさが和らげられていると、さらに大きな喜びとなります。より真面目な詩が掻き立てようとする二つの主要な感情とは恐怖と憐憫です。ところで、いつの場合でも非常に不快なこの感情が適切な記述で掻き立てられると非常に心地よいものになるということがどうして起こるのか不思議です。希望とか喜びとか賞賛とか愛といった感情を生み出す文章に喜びを見い出すのは不思議なことではありません。なぜなら、こういった感情が生まれる場合は必ずそれに伴って内なる喜びを覚えるからです。だが、記述以外の場合に感じる恐怖とか悲嘆には大変大きな不安を覚えるはずなのに、記述によって脅えたり落胆させられることにどうして喜びを覚えるのでしょうか。

そこで、この喜びの性質について考えて見ますと、この喜びは、厳密には、読んだ時の感想からのようには、恐ろしいものの記述から生じていないことが分かります。そういった恐ろしい物を見るときは、自分たちにはその危険がないと思って少なからぬ喜びを覚えるわけです。私たちはその恐ろしいものを、恐ろしいが同時に無害だと考えます。その結果、恐ろしく見えれば見えるだけ、自分自身は安全だという感覚があるために喜びは大きくなります。要するに、私たちは死んだ怪物を見るとき的好奇心と満足感をもって記述の恐怖を見ているのです。

無惨な屍は両足をもって引きずってゆかれる。
それを人々は心に飽きることなく見つめる。
恐ろしい目、顔立ち、剛毛が毛むくじゃらの胸、
火が消えた喉、それらはなかば野獣のものであった²⁾。

2) 『アイネーイス』 8.264-7

私たちが過ぎ去った危険について回顧すること、あるいは、自分たちの頭上に差し迫っていれば別種の恐怖で一杯にさせられるのだが、かけ離れた危機を見ることに喜びを見出すのもこれと同じ理由からです。

同様に、苦痛や負傷や死などの悲惨な出来事について読むとき、喜びは、厳密には、自分自身と苦しむ本人との比較からのようには、その陰惨な記述からは生じないのです。こういった記述によって、私たちは自分自身の状態を重んじることを悟らされ、そういった災難を免れている好運を有り難く思うことになります。しかしながら、人が実際に記述で遭遇する苦しみを受けているのを見るときは、これは受け止めることができない類いの喜びとなります³⁾。なぜなら、この場合、対象が私たちの意識にあまりにも近すぎて、重くのしかかってきますので、自分自身を振り返ってみるゆとりがないからです。私たちの思いは苦しんでいる人の不幸に集中しますので自分自身の幸福に目を向けることができないわけです。だが一方、歴史や詩で読む災難については、それが過去のものあるいは虚構と考えます。その結果、徐々に自分自身のことを振り返って見ることになり、苦しんでいる人の苦悩に対して抱く悲しみを封じてしまいます。

人の心というものは、実際にそうだと思えるよりももっと完璧なものを求め、実際は最高度の喜びを十分かなえている光景を経験することはできません。言い換えると、想像力は目で見るよりももっと偉大なもの、不思議なもの、あるいは美しいものを思い描くことができます。そして、目にしたものの欠陥に気づきます。このため、現実のものを描写するところでは自然を改善したり完成させたりして、そしてまた、虚構を描写するところでは実際よりももっと大きな美を付け加えることによって、想像力を満足させるのが詩人の役目なのです。

詩人は遅々とした季節の歩みに付き従うことも、つぎつぎに植物や花を生み出す自然の振舞いを遵守することも、その義務はありません。記述に春と秋のあらゆる美を書き入れることが出来ますし、より好ましいものにするために丸々一年を利用することも出来ます。詩人の描くバラやスイカズラやジャスミンは同時に開花するかもしれませんが、花壇にユリとスミレとハゲイトウが同時に並ぶかもしれません。土地も特定の植物だけに規制されていなく、檜の木やギンバイカにも適しており、どんな気候でも大丈夫なのです。ミカンの木が自生しているかもしれませんが、垣根はすべてミルラ（没薬）かもしれません。薬味園があるほうがふさわしいと考えたら、直ちにそれを育てるために太陽に命じることが出来ます。こういったことだけでは心地よい光景にはならないとしたら、自然の庭にあるものよりもきつい匂いと濃い色の新種の花を作ることが出来ます。鳥のさえずりも満ち満ちて耳に快いものにする事が出来ますし、森も好きなだけこんもりと生い茂ったものにする事も出来ます。遠景でも近景でも犠牲にはしません。高さ約800メートルの絶壁からでも、高さ約18メートルの絶壁からのように、簡単に滝を流れさせることが出来ます。読者の想像力にとって喜ばしいものにするために、風は自由に選べますし、変化に富んだ

3) アリストテレス『詩学』第6章。

メアンデル川の流れを変えることも可能です。要するに、詩人は抜きん出ようとして自然を変え過ぎて馬鹿げたことにならない限り、自らの手で自然を作り、好きなように自然に魅力を付与してもよいのです。

第419号 1712年7月1日（火曜日）

【アディソン】

とても楽しい思い違い。(ホラティウス)¹⁾

詩人が完全に自然を見失い、その多くが存在しない人物の性格や行動によって読者の想像力を喜ばす類いの著述があります²⁾。妖精や魔女や魔術師や悪霊や死者の霊がこれに当て嵌まります。ドライデン氏は、これを「妖精のような書き方」³⁾と呼んでいます。実際には、この書き方は詩人の空想に頼るほかのいかなる書き方よりも難しいものです。なぜなら、詩人にとってお手本はなく、すべて自分で考え出さなくてはならないからです。

この種の書き方をするためには、とても変わった思考のひねりが求められます。独特な気質の空想と、当然ながら、有益で迷信的な想像力を持っていない詩人はこれを成功させることは出来ません。その上、伝説や寓話、現実的な先入観に同意し、幼少時に吸収した考えに同調できるように、伝説や寓話、昔のロマンスや乳母や老婦の昔からのやり方に精通しておかなくてはなりません。そうでないと、描き出す妖精に自分と同じような喋り方をさせてしまい、特異な対象と付き合い、人間とは違った考え方をする別種の人間の喋り方にはなりません。

森を根城にしているサテュロス、初めのうちは雄弁家のような喋り方をしてはいけぬ。言葉は洗練されていてはならないが、淫らで慎みのないものであってもいけない。(ホラティウス)⁴⁾

私は、『リハーサル』のベイズ氏と一緒にあって、霊は道理の通ったことを喋るべきだ⁵⁾とは言いませんが、話し手の人格と身分に特有の、そしてそれにふさわしく見えるように、分別は少し色あせたものにしないのは確かなところではあります。

こういった描写は、読者の心に喜ばしい恐怖を喚起させ、描かれる人物の不思議さと珍しさによって想像力を惑わせます。また、子供時代に聞いた物語の記憶を蘇らせ、人間が当然さらされやすい密かな恐怖と不安を裏付けます⁶⁾。私たちは外国の異なった習慣や言

1) ホラティウス『書簡詩』2.2.140

2) 第269号参照。

3) ドライデンは『アーサー王』（1691）のハリファックス侯宛の献辞で、このように記した。

4) ホラティウス『詩の技法』244-6

5) 『リハーサル』5幕1場。これはバッキンガム公が1665年に創作した笑劇。

6) 第7号参照。

動を知ると満足します。私たちが、いわば新しい創造物のいる世界に導かれ、別種の人物や振舞いを見ることになる、その喜びや驚きは大変大きなものとなります。冷淡な空想や哲学的な気質の持ち主は、この種の詩は想像力に訴えかけてくるだけの蓋然性がないと異議を唱えます。だがこれに対しては、一般に、この世には私たち以外にも知的な人はたくさんいるし、人間とは異なる法律や経済に従う別種の霊がいるのは確かなことだと応じることが出来るかもしれません⁷⁾。それゆえ、描写されていることが自然であれば、その描写が完全にあり得ないと見なすことは出来ません。いな、多くがそういった誤まった考えに取りつかれています。多くの人に著しい思い違いを信じ込ませているのです。少なくとも、思い違いに味方する楽しい話をいろいろ聞いたことがあります。嘘に最後まで付き合っても構わないし、心地よい詐欺には喜んで身を預けるのだといった話がその例です。

古代には、こういった詩はほとんどありません。なぜなら、実際に、詩の内容はすべてのちの時代の闇と迷信のおかげをこうむっているからです。のちの時代には、人々を騙し、脅えさせて義務感を持たせるために、もっともらしい欺瞞が用いられました。私たちの先祖は、世界が学問と哲学によって啓蒙されるまでは、自然をもっと崇敬と恐怖の念を込めて見ました。そして、しばしば魔術や前兆や呪文や魔法に驚きました。イングランドのどの村にも亡霊がいて、どの教会の敷地にも出没しており、広い共有地にはどこでもその地の妖精の一団がいました。霊を見たことのない羊飼いはまれでした⁸⁾。

この種の詩人たちの中では、わが国の詩人が最も優れています。これは、わが国にこの種の物語がふんだんにあるためなのか、それとも、わが国の気風がこの種の詩に適しているためなのか、私にはまだ分かりませんが。イギリス人は生来空想的で、往々にして、頻繁にあることですが、ふさぎこみ憂鬱な気持になって、ほかの国の人が陥らないような途方もない考えや空想に取り付かれてしまうのです⁹⁾。

わが国の詩人の中では、シェイクスピアが他に類を見ないほど秀でています¹⁰⁾。彼が完璧なまでに持っている気高く途方もない空想が読者のか弱い迷信的な部分を徹底的に感動させます。そして、自らの才能の力以外には支えとなるものが何もないところでも、彼は成功することが出来たのです。シェイクスピアの描く亡霊や妖精や魔女やその他架空の人物のセリフには非常に突飛だが同時に非常に荘厳なものがあります。そのため、それを判断するルールはないのですが、そのセリフが自然だと考えざるを得ません。そして、正直言って、もしこの世にそのような人間がいるとしたら、彼らは九分九厘シェイクスピアが描いた通りに、口を利き行動したと思われます。

時折詩人たちの中で遭遇する別種の架空の人物がいます。著者がなんらかの情念や食欲や美德や悪徳を目に見える形で描写し、それを詩の中で人物や役者にするときがそうです。

7) 第12号参照。

8) ロバート・プロット『スタフォードシアの自然史』(1686) 参照。

9) 第387号参照。

10) 1709年にトンソンが出版したシェイクスピア劇の解説で、ロウはシェイクスピアの想像力の素晴らしさを褒め称え、魔法そのものが非常に荘厳で詩的だと指摘した。

この種の例としては、オウィディウスの場合は飢餓や妬み¹¹⁾、ウェルギリウスの場合は名声¹²⁾、ミルトンの場合は罪と死¹³⁾の記述がそれに当て嵌まります。スペンサーにも同じような架空の人物の創作があります。スペンサーはこの種の描写に見事な才能を持っていたのです。私は以前にこの象徴的な人物については触れましたので、ここでは触れるだけに留めておきたいと思います¹⁴⁾。このように、詩は実にさまざまな方法で想像力に専念しているかが分かります。詩は自然の全領域をカバーするだけでなく、新しい世界を作り、私たちに実在しない人物を提示し、美德と悪徳を備えた魂の機能までも描き出すのです。

つぎの2回では、一般にほかの種類の著述がどうしたら想像力を喜ばす資格を持つか考えて見たいと思います。それでこのエッセーは締め括る予定です。

11) オウィディウス『変身物語』2.768-82

12) 『アイネーイス』4.173-88

13) 第357号参照。

14) 第297号参照。